風の末裔シリーズ・2nd シーズンの6

～シラネアオイ～

眼下に広がる草原。春の淡い若草が、滑らかな絹布のように、波打ってたなびく。
その地平に砂埃が見える。
「もうちょっと高度を上げれば見えるかな？」
濃い縁取りの眼の妖精が手綱を張ると、馬は四肢を一掻きするや、一瞬で空の一点になった。
ツバクロの夏草色の馬は、上昇するのはお手の物だ。飛翔力は里で一番大きい。その反動に慣れているツバクロでないと、ちょっと乗りこなせないだろう。

「見えた!!」
砂埃は騎馬の行軍。モンゴルの大王の凱旋だ。
人間も多いが、周りを飛ぶ目に見えない人外のモノも多い。蚊柱みたいだ。軍隊とか戦場とか、そういう空気が乱れて高揚した場所に何となく生まれる、存在のあやふやな半端者達。
「色々連れて来ちゃって…。今はちょっと近寄れないかな？」
それでも久し振りの弟弟子の顔は見ておきたい。王の側に居る筈なんだけれど…。
その時、蚊柱の真ん中で、翡翠色の光が立ち上った。人外達はたちまち散って霧散する。

「やらかすなぁ…！」
ツバクロは光の根元に飛んだ。
小さな騎馬将がいきなり抜刀して長剣を掲げたので、周りの兵が仰天している。人間には、人外のモノも剣の光も見えない。
「トルイ!!」
後方の豪奢な鎧姿の将が叫んだ。言わずと知れたモンゴルの大王(ハーン)。
(だって親父、こいつら鬱陶(うっとお)しかったんだもん…)
振り向いて目だけで言う息子に、怖い顔で首を横に振る。叱りつつも、自分の息子の力に感嘆する気持ちは抑えられない…って感じだ。
「そんな顔してるよ、…王…」
ツバクロは上空後方から軍勢に追い付き、キビタキの前方に回り込んだ。人間の皇子としての名前はトルイだが、蒼の妖精の弟子として授けられた名前はキビタキ。二年前に別れた時に比べると、驚くほど精悍になっている。
少年皇子の顔が、大好きな兄弟子を空に見つけて喜びに満ちる。その顔が見られれば充分だ。これ以上チョッカイ出すと、皇子は行軍を放ったらかして飛び出して来かねない。
なんせ空飛ぶ草の馬の妖精が見えているのは、キビタキと王

だけなんだし。
ツバクロは片手を上げて、キビタキに、じゃあね、の合図をした。去り際に一応、王にも敬礼した。王は慣れた感じで視線だけで応えた。

二人を見ながら上昇する。不意に影に覆われた。こんな空の上で…？
「この後、仕事はあるのですか…？」
この、凍えた鈴虫みたいな声?!
見上げると、こちらも二年振りの、お馴染みのアイスレディだ。変わりない凛々とした純白の甲冑姿に、ツバクロは思わずドギマギした。
「任務が無ければ、西の森へおいでになりませんか？　皇子も喜びますし」
「お誘いは有り難いですが…」
今日の午後は長が西の森を訪れるだろう。やはり身内だけにしてさしあげるのが筋だ。物凄く惹かれるけれど…。
「自分の任務は終わりですが、仲間が助けが要るようになるかもしれません。僕達、補い合うのが做(なら)いなので」
「そう……」

蒼の狼はちょっと表情を落とした。
「では、空いた時、是非一度いらして下さい。大陸ではお礼もお詫びも中途半端でしたし…」
「は、はい！」

＊＊＊

その二日後、午後から時間が出来そうだったのだが、里へ帰るとノスリが腕を引っ張って、深刻(?)な問題を相談して来た。で、カワセミ改造計画とか、その後、カワセミがぶっ倒れて熱出して一週間てんやわんやだったり…で、やっと約束が果たせたのは、更に二週間が過ぎてからだった。
白い森近くの任務地で仕事を終えて戻ろうとしたら、上空で蒼の狼が待ち構えていた。
「兄様に伺いも立てました。今日は貴方の身柄、預かっても良いと。皇子が逢いたがって駄々っ子で大変なんです」

西の森……別名、鎮守の森。
蒼の狼が子供の頃から一人で住んでいる森。こんもりした木々の真ん中の小さなパオの前に、二頭の馬は降り立った。蒼の狼は先に立ってパオの入り口を開けて、ツバクロを振り向いた。

「どうぞ…。皇子は直(じき)、来ますわ」
あまり何もない室内だ。ベッドと小机と椅子が幾つか。隅に小さな長持ちが一つ。子机の上にポツンと古いカップがあり、薄青の大振りの花が一輪差されていた。
「……」
「何か…?」
お茶を注ぎながら狼が小首を傾げた。
「あ、ああ…長年暮らしているわりに、こじんまりしているなあと…」
「…ああ、そうでしょうか……そうかもしれませんね…」
あやふやな返事。
差し向かいでお茶をすする。何だかすっごく手持ち無沙汰だ。何か話題を見付けなくては。
『あの……』
二人同時に顔を上げる。
「あ、どっ…どうぞ……」
「いえ…どうぞ……」
里の女の子とは軽口を叩けるのに、どうしてこのヒトの前だと頭が真っ白になるんだろう?
「えと、・・あっ、そう、長の子供の頃の事とか、教えて下さいよ!!」
「……さあ……ワタシが気が付いたら、もう前の長に付いて飛び回ってらしたから……」
「……」
あ・あ・あ・話題が広がらない。キビタキ、早く来てくれぇ…!!
今度は狼が顔を上げる。
「えと、じゃあ、貴方の見た兄様の話でもしてくださいな」
「えっ?!」
「だって…ワタシより貴方の方が、兄様といた時間、長いでしょう?」
「あ……」
確かにそうだ。仕方がない…この状況を打開する為に、長にネタになって貰おう。しかし、長の寒いギャグ百連発は、残念ながらあまりウケなかった。これ以上どうすればいいのだろう?
手詰まりになった所で、子机の上の花が目に付いた。白と空色のグラデーションが、このヒトみたいだ。
「これ、何て花なんです?」
「さあ…、ワタシ、花の名前もトンと……」

ホンット、話題が広がらない。笑っちゃう位だ。ツバクロは思わず苦笑してしまった。ふと顔を上げると、狼も同じような感じで苦笑いしている。

「シラネアオイだよ！」

入り口が開いてキビタキが入って来た。

「摘んで来た時、教えてあげたのに、狼ったらそういうのすぐ忘れちゃうんだ。ツバクロスし振り！　逢いたかった!!」

キビタキは一気に喋って、ツバクロに駆け寄り手を取った。先日は気付かなかったが、背丈もびっくりする程伸びている。人間の子供って、なんって成長が早いんだ。

色んな意味で胸を撫で下ろして、三人揃い、狼がお茶を入れ直した。

「帰還の日に顔を見せてくれただけで、全然逢いに来てくんないんだもん。忘れられちゃったかと思ったよ」

背は伸びても、子供っぽい口調は変わらない。

「忘れる訳ないだろ。カワセミが熱出してぶっ倒れたりで、ちょっと慌ただしかったの」

「ああ、カワセミ…、カワセミ元気？　ノスリも！」

「だから熱出して…、まあ、今は元気で飛び回っているよ。それがさ…」

二人が話し始めると、蒼の狼はホッとした感じでニコニコと聞き役に回っている。このパオに、兄とオタネお婆さん以外の一族が訪ねて来るなんて、夢にも思っていなかった。

「え?!　カワセミ、彼女が出来たの?!」

「いや、まだそんなモンじゃないけど…、あったかく見守りましょうか…って段階」

二杯目のお茶をすすりながら、ツバクロは肩を竦めた。

「ふうん…、まあ、カワセミ、カッコイイもんねっ」

「えっ?…えええっっ?!!　そうっ?」

「??カッコイイでしょ?　違う?」

「あ…ああ…」

男の子の『カッコイイ』と、女の子の『カッコイイ』は基準が違うんだろうが…。

「カワセミ…って、あの、髪の長い、色の薄い方?」

蒼の狼が久々に口を挟んだ。

「ええ、身体中、石の鎖だらけの」

「ああ、ビリビリする程凄い魔力を秘めていましたものね。さぞかし女性にも人気があるのでしょうね」

「でしょ!!」
「……」
違う……この母子の基準がズレているんだ。魔力至上主義のカワセミと気が合うかもしれない。

そんなこんなでのどかな時間を過ごして、暇乞いをする時分となった。
「そういえば、皇子を救って頂いたお礼がまだでした。本当に、有り難うございました」
狼は思い出したように言った。こっちもすっかり忘れていた。
「何か、ワタシどもで役立てる事があれば、言って下さいね」
「いえ、そんな…」
と言いかけて、ツバクロは『あのコト』を思い出した。
「あー…、では…図々しいんですが……」
と、ここで、従姉妹の一張羅を台無しにして怒らせた事を話し、女の子の喜びそうな絹は調達出来ないでしょうか？　と訪ねたのだ。
「そういうのだったら、城の倉庫にゴッチャリあるよ。俺、取って来てあげる」
「トルイ、一応ヴォルテ妃を通しなさい。そういう訳で、ツバクロ、すぐには無理ですが、準備しておきます。どんなお色がよろしいのかしら？」
「え？　何色でも良いですが。ああ、いつも髪にオレンジ色の毛糸を巻いているから、そういう色が好きかもしれないです」
「そう…分かりました…」
「そのヒト、ツバクロの彼女さん?!」
「い・と・こ・・!!」
その日はそんな感じで別れた。
反物だけで良かったのに、狼は上下揃いの衣服に仕立て上げてくれた。手から手へ品物をただ流すだけではなく、自分の心も揃えたかったのだろう。恐縮しつつも、あのヒトらしい…と、ツバクロは心温まった。

＊＊＊

秋風が立ち始めた。
ノスリは白い森の岩山の上にいた。特に用事がある訳でもない。任務の帰りがけ、たまたま眼下にして立ち寄ったのだ。
ここは好きな場所だ。そして物思いに耽(ふけ)らせてくれる場所だ。
湖の巫女殿が加わってから、ここ数ヶ月、めっきりカワセミと組む事がなくなった。お互いに良いコトなんだろうが、やは

り一抹の寂しさはある。
奴にはひ弱い身体に絶大な魔力、自分は強い身体に奴の魔力を貰って働いて来た。
実の所、長の弟子として、自分には術の力が足りなさ過ぎる…と感じていた。カワセミがいないんなら尚更だ。
ノスリには大地の精気を集めて己の身体で体現出来る、立派な技があるのだが……得てしてこの手の若者は、自分の価値に気付きにくい。
「ふあぁぁぁ〜〜・・・」
溜め息とも何とも付かない息を吐いて、後ろに倒れて寝っ転がったが、何故か空が見えなかった。
「……?-?-?…」
顔の上にファサリと何かの布が被さったのだ。
「あら……」
鈴虫のような声。
ノスリはビックリして飛び起きた。
「…すみません…。急に仰向けになられるとは思わなかったもので……」
抑揚のない声がして、真後ろに、あの氷の妖精みたいな、長の妹君が立っていた。ローブの裾が今フワリと戻った所だ。上空にいつの間にか『あの』草の馬。
要するに、馬から飛び降りてノスリの真後ろにスゥッと降りて来ようとしたのが、ノスリが急に寝転んだもんで、ローブの裾が顔に掛かったのだ。
それにしても気配を全く感じなかった。流石だ。
「あうっ!!　…す、すすすすみません…!!」
ノスリは耳まで茹で上がって、訳もなく両手を振り回した。
「失礼してしまったのはワタシですのに、ノスリ殿」
相変わらずの凍り付いた無表情だ。
「ノ、ノスリで結構ですっ。何だってまた、後ろに…。目の前に降りてくれりゃあいいのに!!」
「驚ろかそうと思って…」
「は、…はぁ?」
「だから…驚ろかそうと思って…」
相変わらず無表情だ。
「はあ…」
「こう、後ろから目隠しして…」
狼は両手を付き出して輪っかを作った。
「……」

要するに、だ～れだ！　って奴ですかぁ？　ツバクロの従妹のフィフィによくやられている奴だ。お団子娘ならともかく、この凍り付いた声でそんな事をやられたら、心臓が止まってしまう。
「い…いいですっ、普通にっ…普通に降りて来てくれてっ。そんなサービスしてくれんでも!!」
「そうですか…」
この若者があまり大袈裟に慌てふためくので、女性は何だか酷く申し訳ない事をしたように、項垂れてしまった。
「皇子に…、貴方がたにもう少しフレンドリーに接した方がいいよ、って言われて…」

ノスリはやっと落ち着いて来た。
このヒトは、恐らく子供の頃から戦場に身を置いていて、ありふれた呑気な社交性…って奴が欠如しているんだろう。
「いや、すまんです。自分も慌て過ぎました。お久し振りです、蒼の狼殿。キビタキは元気ですか？」
ノスリはやっとマトモに挨拶出来た。
「ええ、元気ですよ。ご無沙汰してしまって申し訳ありません。本当なら、こちらから、御礼に参じなければならない物を」
「え？　お礼…？」
「皇子を助けて下さったでしょう。ここで、ツバクロを呼び止めて…」
「あ、ああ…」
思い出した。あの日の事だ。
「俺は……何もしていません。予知したのはカワセミだし、大陸まで飛んだのはツバクロだし…」
「それでもカワセミをここへ連れて来たのは貴方だし、ツバクロを説得してくれたのでしょう。やはり恩人ですわ」

「……」
ノスリは黙って俯(うつむ)いた。
「本当に、有り難うございました。皇子も…」
「俺は…！　ホントに、何もしとりゃせんのです！」
「ノスリ…？」
ノスリは更に俯いたので、狼の凍て付いた表情が崩れたのが見えなかった。
「カワセミの奴は本当に凄い魔力がある。あれなら将来長として、充分過ぎるほどだ。ツバクロは頭が良くてソツなく何でもこなす。人望もあるし、術だって一通り使える・・・」

ノスリは言いながら後悔していた。なんでこのヒトにこんな事言ってンだろう…？

不意に額に温かい物が触れた。

びっくりして目を上げると、目の前に蒼の狼がしゃがんで、瞬きもしないでノスリを見つめている。片膝付く…とかではなく、両膝揃えて屈み…本当にしゃがんで、ノスリの頭に片手を乗せている。まるで幼児をあやす母親のように。

「…わっ…あわわ…！」

ノスリは仰天して後ずさった。

しかし狼は彼の頭から手を離さなかった。後退したノスリに合わせて今度は両膝と片手を地面に付き、身体を伸ばして頭に乗せた手をクシャクシャと動かした。

「…大丈夫」

はなだ色の瞳が柔らかくなり、目のやり場に困ってテンパっている若者を映した。

「へ？　はあ…」

「大丈夫、大丈夫・・」

今度は両手で若者の頭をクシャクシャと撫でてから、やっとその手を離してくれた。

「術なんて、いつか急に使えるようになるモノです」

「え…？」

今まで周りに言われて来た事と逆だ。即ち、日々の積み重ねから少しづつ上達する…とか、出来ない事はいいから、出来る事だけ伸ばせばいいよ…とか。

「ワタシが、そうでした」

狼は身体を引いて、ノスリの隣に腰掛けた。

「ある日突然出来るようになったんです。それまでは、ほーんと、ダメでした。破邪の剣も、五、六回に一回位しか成功しなくて、空振りばっかりしていたし…」

「……長は…貴方の剣は自分より上だって…」

狼は、はにかむように首を横に振った。

「戦場に出て、最初の十数年は、役立たずでした。王に戦線を外された事もあったんですよ」

「じゃあ…じゃあ、何で？　教えて下さい!!　どんな切っ掛けで術が使えるようになったんですか？!!」

今度はノスリが狼に迫った。

狼はちょっと表情をくすませた。

「さあ…色々ありましたが…何が切っ掛けとかは…。でも、ひ

とつ貴方に教えられる事があります」
「な、なんですか?!」
女性ははなだ色の瞳を柔らかしてノスリを覗き込んだ。
「貴方のせい、ではないんですよ」
「??…ん、えと…?」
「貴方以外の、色んな要素が重なって、まだ貴方の『その時』が来られないだけなのかもしれない。だから、焦らず、信じて、毎日を明るく生きながら待っていればいいんです」
「……はあ…」
ノスリは、少しは救われたが、まだイマイチ気持ちが晴れなかった。
「オタネお婆さんに聞いて御覧なさい」
「はい?」
「生まれてから何十年も経ってから目覚めた能力もあるって」
「ホント、ですか?」
「お婆さんとかワタシから見たら、貴方なんかまだまだ可能性のカタマリのヒヨコ以前の卵ですよ」
狼はもう一度ノスリに真正面を向けた。
「だから、大丈夫、大丈夫…」
もう一度両手で彼の頭をクシャクシャする。それ自体が不思議な呪文で、何だか本当に大丈夫になりそうな気がした。
狼は立ち上がった。
「お邪魔してしまいました。でも、話せて良かったです」
ノスリも立ち上がり、今更身なりを整える。
「こちらこそ…あ、なんだか、すみません、グチって…。あの、有り難うございました」
狼は馬を引き寄せながらもう一度振り向いた。
「お礼は…こちらが言いたい位です」
え? って顔のノスリを後にして、狼は馬を舞い上がらせた。風が頬に当たって心地良い。
大丈夫…って言って貰いたかったのは、過去の自分だ。あの頃の自分と重ね合わせたあの若者にそれを言えた事で、過去の自分も救われた気がした。
ノスリは王都の方へ見えなくなるヒトを見送ってから、自分の馬に股がった。怪我で入院中のツバクロに、あのヒトに会った話をしたら悔しがるかな? ローブの中まで見た事はちょっと言えないが。
もういつもの彼に戻れていた。

＊＊＊

巫女を湖に送ってから、カワセミは王都方面に飛んでいた。今日の任務の道々、石の鎖の一つを落とした事に気付いたのだ。

「私も一緒に探します」

「大丈夫だよ。巫女は冬囲いの準備で忙しいでしょ。明日はボクも手伝うね」

巫女の馬に遅くなる旨の手紙を付けて里へ返し、カワセミは一人、来た道を戻った。

「何か、違和感を感じたのはこの辺りなんだよね…」

白い森の上空で馬を停止させ、両手を回して印を結んだ。

「失せ物――　捜し物――　戻って、こ――い!!」

いきなり眉間に強い電気が走った。

「ひゃっ!!」

白い森の木々の中頃だ。

「何？　この強い感じ？　あんまり厄介なモノに関わりたくないなあ…」

カワセミは恐る恐る馬を降下させた。

「あ……」

夕暮れの森の中でそのヒトは居た。

相変わらずの凍り付いた表情、荒野の狼のような気配。掌にはカワセミの石の鎖が掛かっていた。

「随分デタラメな呪文ですね。それで、しっかり効いているのが凄いですけれど…」

蒼の狼の手の中で、石は光を放ち、小さく震えていた。

「えと…、こんにちは…。それ、ボクの落とし物なんです…」

カワセミは下馬して後ろ手を組んだ。

「護り石の陽と月…それに土…、理にかなった繋ぎ方ですね。長が繋いだのですか？」

狼は一歩も動かないで、石を木漏れ日に透かして眺めている。

「ううん、それはボクが繋いだの。理屈ってあるんですか？気持ち悪くならない感覚…に繋いだんだけれど」

カワセミもやはり動かないで、足元をモジモジしている。

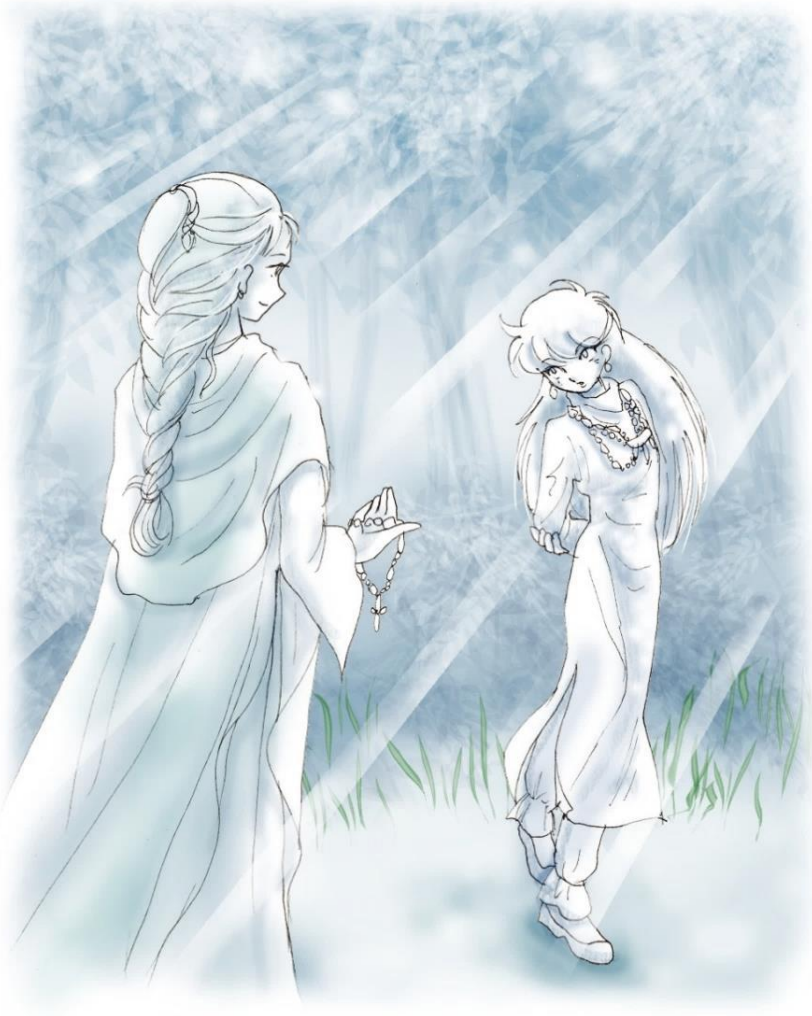
狼はカワセミを見て、ちょっと肩をすぼめてから、彼に近寄って石を手渡した。

「…ありがと……」

受け取る手にも別の石が巻き付いていて、キンキンと共鳴し合った。

「凄い数の石ですね」

「ん…、こちらを立てればあちらが立たず…って感じで増えちゃった。今はこれで丁度良いかな」
カワセミは上の空で、返ってきた鎖を急いで手首に巻き付ける。
「ふい〜〜…、生き返った！」
「…そんなに、それが無いと不安ですか？」
「みんなおんなじコト聞くね!! 黙っていても息が吸えて、心臓が動いて、血がチャンと流れてるヒトには、解らないコトなの!!」
「そう…ごめんなさい……」
女性が俯(うつむ)いた間に、カワセミはポケットに手を入れ、何か探った。
「はい、これ、あげます!!」
「…？？」
差し出された拳から狼の掌に落とされたのは、薄ピンクの平たい石だった。
「石を拾ってくれたお礼です。運気が上がるよ！」
女性はキョトンと石を見つめたが、すぐに眼を細めて嬉しい顔になった。
「有り難う。そう、もう一つお礼を言わなければ…」
「ん、ん〜〜？？」
「皇子を助けてくれたでしょう。あの子の危険を予知して」
「ああ、そう？ あれは当たり前、仲間だし!! キビタキ、元気?!」
「元気ですよ」
狼ははっきりと微笑んだ。
「狼さんは白い森に何か御用だったの？」
カワセミは首の石をいじくりながら、アサッテの方を向いて聞いた。
「ああ、これを…」
狼は茂みに混じる薄青の花を二つ三つ手折った。
「これを、採りに来たの。綺麗でしょう」
「うん……」
カワセミは首だけそちらに向けて、上の空な感じで生返事した。
「ねえ…狼さん」
「はい？」
「夕焼け、キレイだよ」
「……」



二人は馬を引いて森を出て岩山の方へ歩いた。山を上ればきれいな夕焼けが見えた。
「大陸の夕焼けもこんな、キレイ?」
話題がポンポン飛ぶので、さすがの蒼の狼も戸惑っている。
「ええ、あちらの方が、湿度があるせいでしょうか、オレンジが強い感じで…」
「オレンジ…っていえば、フィフィに金魚みたいな服、有り難う!」
「あ……ええ…」
狼も苦笑いだ。
「お陰で、ボク、フィフィに追っ掛け回されないですんだ。ああ、後、巫女の服も有り難う!」
「…イルが、ワタシが縫ったって?」
イルがあまりそういう事を喋るとは思えないが…?
「ううん、…えーと……ごめんなさい」
「…??」
「長にはね、あんま、やっちゃ駄目って言われているんだけれど……巫女の袖口を掴んだ時にね……あ、ボクそういうの、見えちゃうの……貴方の顔がね、見えたの」
「…まあ…」
「凄く凄く心を込めて、刺繍を刺してた!」
「……」
「だから、ボクもつい、有り難うを言いたくなりました」
長も、ツバクロも、カワセミの話になると苦笑い半分でも楽しそうだった。狼にもそれが理解出来てきた。
カワセミはもう一度夕焼けを見上げた。
「きれい…。でも、大陸の夕焼けはもっとオレンジなのかぁ…。オレンジ…なのかぁ…」
「貴方にも見られるでしょう。これから長として大陸に渡る機会だってあると思いますよ」
「無いよ!」
カワセミはキパッと言った。
「ボク、高度の高いトコ飛べないモン。身体がイヤがるから。長くも飛べない…。だから遠くへ行けない…。草原だけ……」
カワセミのテンションが段々尻すぼみになった。
「いいんだ、ノスリやツバクロに教えて貰うから。彼ら、これからどんどん遠くへも行くモン」
淡色の細っこい妖精は、元が色が薄いだけに、夕陽の色にすっかり染まっていた。

「……」

狼はその妖精の前に、右手をスイッと差し出した。

「……？」

妖精は水色の真ん丸な目でそれを見つめる。

「どうぞ、握って御覧なさい…」

「…？？？」

カワセミは目の前の細い白い手と狼の顔と、交互に見比べて、両手でその手を握った。

「わあああああ!!」

目の前にいきなり、網目のように流れる川…、地平まで続く森…、それらを染めるオレンジの夕焼けが広がった。鮮やかなオレンジが川の網目模様に輝いている。

その風景を見る視点は凄い速さで移動している、草の馬で飛びながら見る風景だ。

「あああああ!!　凄い！　凄い…！　空が燃えているみたい!!」

カワセミの白い頬がそこに居るようにオレンジに輝く。

小さな丘の裏側に黄色い花が一面に咲いている。

「あっ、あの花、里にも咲いているよ!!　ツバクロが持って帰って来た奴だ!!」

・・・・・・・・・・

ヘタリ込んで仰向けに寝転んだカワセミの頭を膝に乗せ、狼が額に手を当てている。

「ふにゃあ……スミマセン……」

「いえ…貴方がこんなに風景に入り込んで、そんなに体力を使うなんて…、知らなくて、ごめんなさいね…」

「ううん、すっごく凄く、きれいだった。それを見ている貴方も、きれいな心で見てた」

「……」

「戦場に居るヒトって、怖い匂いがすると思ってた。貴方…ちっとも……そんな匂いしない……」

カワセミが首をゴロンと横に向けて、ムニュムニュ眠掛け漕ぎだして、狼はその額を撫でながら背後に声を掛けた。

「お出迎えご苦労様…、でも何で隠れるんです？」

背後の離れた岩陰から、ツバクロとノスリが顔を出した。

「何となく、こういう時って、隠れる習性があるんです」

「まったく、何だってこいつだけ、こんなに『膝枕運』があるんだぁ?!」

「貴方もピンクの石を着けていれば、運気が上がるかもしれませんよ？」

＊＊＊

キビタキは城に缶詰めだった。

遠征から帰って、それで終わり、じゃない。臣下達…時には父や兄達に囲まれ、軍議に加わり、政(まつりごと)に参加した。殆どロは挟めずその場に居るだけだが、皆がもう幼い子供じゃない…と、認識していた。

そう、もう、草原を駆け回って遊んでいられる…子供じゃなくなったんだ…。一度戦に出ると、そうなるのは分かっていた。自分は皇子だし、モンゴルの大王の配下なんだ。

コトリ……

ベランダで音がした。

「…狼……？」

蒼の狼がここへ来るのは、以前はなかった事だ。

「今日は誰かに逢ったの？」

「カワセミに。後でツバクロとノスリも迎えに来ました」

「本当？　みんな元気だった？」

蒼の狼は、今まで必要のない時は、ほとんど西の森から出なかった。それが最近は、何度か白い森辺りに出掛ていた。

空にキビタキの兄弟子を見掛ける度に、西の森から馬を走らせる。自分でも甘いと思うのだが、皇子が皆の話を聞くのを喜んだからだ。

本当に甘い……と思う。それで皇子がちょっと喜ぶ顔を見て、自分も嬉しいのだ。

「これで一通り、逢えましたね」

狼は王子の部屋の花生けに、薄青の花を差しながら言った。

「うん、狼、有り難う。どっちかと言うと人見知りなのに、俺の為に、頑張ってくれて」

「そんなに頑張っていませんよ。わりと楽しかったですよ」

「そお?!」

キビタキはツバクロにだけは直接逢いたがった。何でか、狼は聞かなかったが、共に居た時間が長かったし、思い入れがあったのだろうか。

皇子は無理に時間を作り、長に伺いを立て、半ば強引にツバクロを西の森に引っ張って行った。

本当に甘くなったな…ワタシ。皇子が、王の側付きになり、一つの役目を終えた気持ちになっているのかもしれない。

「じゃあ、ワタシはこれで…」

「おやすみ、狼…。風邪ひかないようにね」

飛び去る草の馬を見送って、キビタキはそのままベランダに

寄り掛かった。
一生の内、ずっと顔を合わせているのに、心に残らない者もいる。たった二週間程しか共に居なかったのに、多分一生忘れないあの三人を、思い浮かべながら呟く。
「…遅くなったけれど…、これでいいかい……？」

あの日、白い森で、カワセミに頼まれた事。
『狼に会わせて欲しい』
あの時は、良い出逢いになると思わなかったから、断ってしまった。今なら、良い出逢いが出来るんじゃないかと思った。どうやらそうだったみたい…、良かった……。
「でも君だけは別だよ、ツバクロ…」
キビタキは一番最初から自分をかばってくれた兄弟子を想う。
「僕だっていつまでも子供じゃないんだ」
いつだって自分を大事にしてくれた、一番大好きな兄弟子…。
「だけど…母さんと二人きりで逢わせる訳には行かない。せめて、親父が生きている間は待っていてくれ。妖精は人間より遥か長く生きるんだろ？」
城下の歓楽街は夜中まで賑々しい。城の中は篝火だらけだ。お陰で天の川なんて小さい星の集まりは半分も見えない。
「大人になるって楽じゃない……」
ぽつんと呟いたキビタキの声は、いつの間にか大人の声だった。

～おしまい～

二〇〇九・九・某

女の子はさわっちゃダメ!!
術が逃げるっ
へ〜〜〜ほぉ〜〜〜
ぺと
ぺた
やめてよっ!!
ほれほれ
きゃっきゃっ
いじめちゃえ〜〜
いやぁん やめてよぉ
キャッキャッ♪
ウフフ♪
あいつぜってーワザとだよな
策士め…
ああ…